新編水滸畫傳

初編

七

21
875
7

特
門 遠21
號 875
卷 7

新編水滸畫傳卷之七

東都　曲亭主人編譯

花和尚大了桃花村を鬧す

さても桃花山第一の頭領ハ今夜第二の頭領が劉太公の家へ入贅するを聞き。豫て人を彼処へ遣ハしてその光景を探らせしに。その人急地小嘍囉あり。走り帰りて。さて何とせんと叫びしが。第一の頭領ふゝゝ怪しからぬぞ。ゝ。ハ。小嘍囉あり。息せ切て仔細を告げる。折しも第二の頭領ハ頭巾をも被らず。緑羅袍をも扯被れ。大ひに慌てて逃来る。馬ハ。ハ。ハ。あくまで哥ゝゝを救ふべしと。叫び。ふ一の頭領驚き。ふ。その情由を尋ぬるに。今夜彼劉太公に謀られ。兇猛和尚と打ち。一五一十を物がたりす。一の頭領大きに怒り

うく汝ハすぐ房ヨ入ゝ保養せよ。これ立地ヨその和尚を殺ゝ。他を報ぐゝいひもちぐぞ。猛ヨ馬ヨゝち跨ゝ鎗を執げ走り出わぐ。許多の小嘍囉ゞ。前後左右ヨ従ひつ。一齊ヨ喊をつくりみ。桃花村を呈ゝ走来れば。劉太公の莊客。喊声まんヨ気。山中のくゝ数を盡して来れゝ報ゝる。この時魯智深。おほ酒を喫ゝ居ゝうしゞこの報を聞くゝ。敢て直裰を脱ぎて。戒刀を跨。禪杖を提ゝ大踏ヨ歩ゝ出打麥場のわゝりみ到。見れば桃花山第一の頭領ヨ馬を莊前ヨ走ヒ長き鎗を提ゝ。目を睜声を高くし。彼麤驢ハいづこヨある。ちゝ勝負を決せよ。ゝれば魯智深ヨ大ふ怒り。この鳥人舌長しゞうゝ来りゝ罵ゝ。禪杖を輪起ゝ。彼頭領ふ打ゝかゝを鎗ヨ丁ゝ逼住。和尚且ゝ戦まやめよ。

汝ガ声音ヨガ耳ヨおぼえあり。名字を志ゝせゝ。魯智深答ゝ。ゝれハ是老种経略相公帳前の提轄魯達ヨ。今出家ゝ和尚ゝヨ。魯智深ヨ保ゝぞ。いひも果ぞ。彼頭領ヨ鎗を投捨馬ヨり飛下ゝ拜伏ゝ。哥ゝ来ゝ。ゝれ恙ゝ。ゝ来ゝ。ゝれ恙ゝ。ゝれいふ李忠を見ゝ。魯智深ハ火把の光ヨ看一看れば。往ヨ江湖上棒を使ひ茶を賣ゝ教頭打虎將李忠なりゝれば。ゝいふ。ゝうち弱き。左ヨ別後の恙ゝを。ゝこゝ。ゝるぞ。劉太公ハとの光景をゝ丈ヨおどろき。原来和尚も一路ヨ。ゝりゝと怕まぐひぬ。その魯智深ハふゝび直裰を穿ゝ李忠を聽上ヨ伴ひ劉太公を喚ゝ。太公彼を怕れ。彼ハゝが兄弟なりゝ。ゝば。劉太公いふ。駭怕ヨ頭を低ゝ回答ゝ。

鋒をきづいて
李忠
魯智深
を認

えせて魯智深ハまづ次ニ李忠を咤らせ。その次ニ劉太公を咤らせ。
さて潤州ニ至り。鎮関西を打殺せし首より。五臺山を開せし。此度
東京の相國寺へ赴く尾さぐらうへおちもゐ物うり。汝ハ又
いかなる故ニか。かゝる生活をあまたでとゝいへバ。李忠答ふ。それがしの日酒
樓を出ル史進ハもとより。次の日ニ到ル。ゆゑハ哥ハ鄭屠を打殺し
ものしり風なまるふよりて。速ニ史進を尋ル。商議まべく思ひし
做公人おそれがしをも捉へんとするよしなるべ。遂ニ史進を尋ねまぢ
ル潤州をもち去り顧ニ路を走せ。日を経て桃花山の麓をまつし。
向ニ山中ニ寨をかまへる。小霸王周通といふの。小嘍囉を引て路を
遮て。それがしに鋒先をあらそひ。周通ハかなハぬ。和睦
し。それがしを山中ニ住めて寨主とし。彼ハ等二の交椅ニゆ。

ゐ第と稱ず。それがしも投ずべきうもあきらめ。ニ落草して今
月ニ到ル。と扨ハ魯智深ハ。ちゝび汝周通ニ流ル。今番の親
ゆを休ませ。この劉太公ハ只一人の女兒ありて。老後の便とする
を。強て娶ル。きハ父子の情願をむなしくまもるべ。足いてもて記ゆ
ざやくいの劉太公ハこれを扨がうをめて。ゑを易し。俄
頃ニ酒食を安排して。魯智深。李忠おを管待ル。さて劉太
公ハ原定ニ。せ一金子ニ段匹をとり出せハ。魯智深ハ。ちゝび李忠ハ
對ひ。この件ハ汝が身上ニ係れり。汝ハ計ひ。ゆ李
忠ニ容易ニ引て。この哥ハ少しも妨ぬ。すべ哥を山中ニ
住めべ。劉太公も来ル。いそぐ。ちゝび劉太公大ハ
ちゝび莊客をまぢ。輜子を准備せ。魯智深が行李禪杖ハ

ゞを扛擡せ〳〵。智深を轎子よりおせのなる轎子
うちのめれば。李忠ハ馬ゟうち跨ぐふりつゝゟ打つれ〳〵桃花
山よりいけば。その夜も既ゟ明ゟさり。か〳〵魯智深劉太公ハ
寨の前ゟ〳〵轎子を下り。賓れ〳〵聚義廳ゟ到り。そのゝきゝ
李忠と周通を呼出し〳〵。魯智深ゟ相見さるゟ。周通ハ和尚を
ゝく〳〵。こゝろの中ふゝく憤り。哥〳〵ことゞゝゟ仇を報んとハせざして。
訃て渠奴を綉引ひしゝ。ゟほうゝきめてせん〳〵のゟ放これ當
初彼が為ゟを考なゝゞ。〳〵盧〳〵その拳頭を喫べきゟ
いよ。李忠〳〵ち笑ゝ。この和尚ハこれ豫〳〵沙ゟ拉〳〵ゝ。ゝゝふ。ゝゝ
拳ゟ鎮関西を打殺せ。魯提轄なりといへハ周通ゟゝび大ゟ驚き
ゟを翻〳〵拜伏し。それゞ眼ありゟゞ豪傑をゝゞ恕ゟ

周通ハ是却〳〵真の大丈夫

ゟ〳〵陪〳〵ゞ。魯智深ゟ礼儀を選〳〵。向ゟ拳を用ひ〳〵ゟ
礼をなすなし。周通ゟ〳〵なゟ。この劉太公ゟハ只一人の女児あり。とゞを
且暮のゟ〳〵〳〵〳〵。老を養ひ終を送り。ゟゝん後ゟそのゟ
ゟ〳〵香花を受べく当ひて〳〵を沙強〳〵聚る〳〵きハ彼が念願徒ゟ
〳〵なりて。その家断滅ゟ及ぶべし。天下の美女彼が女児のゟゟハ限ゟ
ざ。汝この親事を休〳〵。別ゟ婦人を選ゟ原定ゟせ〳〵金子段匹も
齎〳〵まゐり。汝ゟ〳〵ゟいゟゟ〳〵ハ周通ゟゟ伯羨〳〵。既ゟ哥〳〵の一
言をゟけゟゟぬ。それこのゟち彼家ゟ出へいゟをゞ〳〵ゟ魯智深ゟ
〳〵。劉太公もゟゟあり。それゟゟまのゟゟを倣ゟ。翻悔あゞ〳〵ゞ〳〵ゟ
ゞ。周通箭を折〳〵誓をゟまをゟゞ。劉太公大ゟ喜び。彼金子段匹を
悉〳〵絶さ。拜〳〵ゟれ〳〵莊院ゟゞ〳〵りゟる。さる程ゟ李忠周通ハ

牛を推馬を宰魯智深を管待て數日あり。一日償して山前山後の風景を遊覽さまてるあ巖の四方あ峨々と聳只一條の徑あ曲々澗を隔て草生紛紛宜あ嶮岨の山陣なり。魯智深いとゝお逗留して既あ日を累ね。遂あ別を告て東京へ赴んといふ李忠周通こゝを聞て。あは叮嚀あ住ましとも。こゝも住る氣色なれば。次の日両頭領い酒宴を設金銀酒器あんゞを尊の上うおきまくべく。既あ盃を勸んとする折しも。小嘍囉走り来て目今山下あ二輛の車を拖て。十餘人の旅客来れりと注進を李忠周通はもあんず。衆多の小嘍囉をはびあのめ。魯智深うに業ていはせ。哥と自在あ酒を喫くもいはせよ。我們彼賊物を奪ひ来て。餞いとさべ〜らひつて。只二人の小嘍囉を殘しもき。山下を

李忠物をしくの
ふきこゝけ
い魯智
深酒渭州
の酒樓
もくこと
ぎりお
きう

走去り是べ。魯智深こゝろあり山ゆう。彼ホ稟性慳吝ふうく。汗多の金錢を貯あゞ。あは人あ施をるのを惜て新ホ人ホ茶はめく。おの是が義理をつくろうんとて。今彼ホを一騙おゞうさざやと。ひしらべ。洒漉ホ付り。一西人の小嘍囉を忽地撞〜蹋〜ふ〜つ。膳膳鮮〜柱ホいく〜綑て呉ひ。此の麻核桃を塞セ。ちゞ包裹ホ脊肩に。戒刀を跨へ真長老の書簡と衣包を項ホうけ。禪杖を把のゞく。阜の上ホ飾おきくる金銀酒器ふんゞを。殘りふく衝碎き〜微塵ふかく。捨て後の山あ走り出て。こ是べ。ぢく嶮岨ふし て脱ま出べきもうもおれど。り〜ふ前の山より走り出ぶの。ふ〜ざ彼黨ホ行あゞ。只向ホ人おきくる徑をゆき〜。滾將下んと思案つ。ゞ戒刀と包裹を禪杖ホ拄つけて丟落。その、ち一滾ホ骨碌

李忠ホを懲
魯智深桃花
山を滾下

骨碌と滾び墜ちバ。山の脚辺ゑ滾到て。些も傷損ることなし。やがて
跳起て。包裹と戒刀を携ひ。杖乃禅杖を衝あつて。東京を投
て走りいなさて又李忠周通ハ。山下ゑ走り下りて。彼旅人ゑを遮て住
汝ゑ命をしてハ買路銭を留て置ばゝ。小嘍囉ども一齊に喊を納
ゐる。彼旅人のうちに。猛き漢子あり。大ゑ怒り。朴刀を撚りて李
忠ゑ搶て。一来一往一回一去。闘十餘合ゑ。おのゝ勝負をとる
す。時ゑ周通鎗を挺て。まこと来れバ。小嘍囉ども。面もふるゝ
敢て。ゆるゑ。黙の旅人途をうしなひ。四落ハ落ゑ逃ゆけバ。彼一人も
拄て。ゆうゑ。刀を掩て。走り去て。李忠周通ハ車の賊物を
奪ひとゝ。せ。凱歌を和著て。慢ゝ北と山寨ゑ立入り。只又ゑハ殘
おきて二人の小嘍囉ハ一堀ゑ綑つけらゑ。金銀酒器ハ紛失して。羊

い微塵ゑ碎て。れバ。衆皆こゝいふゑ。ゝも。驚るき。周通まづその縛を
ゝきて。故を問ゑ。二人の小嘍囉ハ。志ぐのよしを。ゑ。周通冥
く。この和尚ゑ好人ゑあるぞ。彼那里ゑり逃ゑ去つゝんとて。ゝ。團
と踪跡を尋て。後ゑ山ゑゆきて。又ゑ。ゝ。この処ゑり滾下
りとおぼしき。一帯の草木左右ゑ偃ゑれて。あり。しるべ周通
まんゝ。呆れ果て。この悪僧却て。老賊ゑ。ゝ。ゝ。かゝる峻嶺茂
滾乃んゑ。尋常のものゝ及ぶべきゑあらぬといふて。舌を巻て。嘆
ずゑハ。李ゑ忠ゝいふゑ。我們り。彼を索出して。ゝを。ゝ。ゝ。故き。ゝを
破べゝ。ゝ。面ゑ着て。怨さんやといへバ。周通又いふゑ。縱彼を索ゝと
那里を投て。迂ゑくべきよゝ。ゝも。彼ゝ勝ゑ。ゝ。ゝ。
よゝ。ゝ。この。ゝ。ゝ。捨おくとて。後ゑ環會して。却て。後ゑ。ゝ。

とゝ。集ひ来り賤物を二分よりも一分は小嘍羅あるよりせ只顧魯智深を住おきしものを後悔せり。かゝる魯智深を桃花山を離るゝ。朝まだきより路を走り。既に午後になりしゝ。市井より出で約五七十里も来つゝ甚餓て扣ほうなりゝれば東を望て西を入り。さて那里ふうび食を乞ふ家のゝ。ゝ。志ざし停立る折しも遥に鈴鐸の声聞えしゝ。原来この寺院やあるゝ。宮觀の簷前よりけし鈴鐸の風のまゝ響ゝ。さてさいび彼処に尋ゆきゝ。斎をも投免ゝ。ゝぐち。彼鈴鐸を郷導ゝ。おぼつかなくもたどりゆきゝ

○九紋龍赤松林に前刃逕を當時魯智深の數箇の山坂を走り過ゝ。一ッの松林ある処に到しゝ

ゝれをも行ぬけゝ。半里あまり。頭を擡ゝ見るゝ。一ッの敗落寺院ありゝ。彼風に吹ゝ響ゝ。との山門の鈴鐸をしゝ。贍あゝ。門上に舊朱紅の牌額あり。瓦罐之寺ゝ四ッの金字を写ゝ。又ゆゝ四五十歩みゝ。一條の石橋をつゝ。寺内に入ゝ。既に年代を経る大刹ゝ。ゝ。ふ朽損ゝ四壁完ゝ。鐘楼は倒塌殿宇は崩摧。山門は盡蒼苔を長ゝ。經堂は荒ゝ碧蘚を生ず。釋迦佛は角ゝ蘆ふ膝を穿ゝ。雲山に在せゝ。時もゝ出れ。觀世音は荊棘ふ身を纏ゝて。香山を守ゝ。一日に仆ゝ。諸天は壞損して懐中に鳥鵲巣を営ゝ。帝釋は斜に欹ゝ。口内に蜘蛛網をまび。方丈は凄凉。廊下は寂寞ゝ。頭なき羅漢は。この法才に也災殃

を受めいろん背を折金剛と神通あり〻もいうみ施一展ん香積厨中みへ兎穴を覓し龍華臺上みへ孤踪を印す魯智深ハこの光景をうん繕〻〻知客寮より到りが門も壊さ〻〻礎のこを留め四圍の壁おち〻〻人なり〻〻もおぼえぞ。かゝる大刹のあゞてめ〻はゞ〻〻敗落しぞとおりひつ。やゞ〻〻方丈のうゝみ赴よ滿地ハ燕れ糞堆し〻〻。天井ハ蜘蛛の網よ縷〻〻。さり〻〻もおぼし〻〻只顧ゆ門まうれども。松風の音のゝ〻〻。誰そと答るものもなし。彼処み人や〻あ〻〻て。香積厨中みも繞生れぞ。人いさしなり。鍋も釜も〻〻て。竈頭も掲損〻れバいうまもせんきぐあ〻。包裹を解下して監齋使者厨房のあるところの木像なりの面前よさし。むき。禪杖を提く厨房の後面うの尋ゆ〻よ。こ〻み一軒の小屋あ〻〻。裡みハ幾分固の老僧團坐し〻〻りる

ぶいこ面黄こと肌瘦〻。この世けんもうえぞ。魯智深ハ搖しまゝ〻ハ〻〻声をふり支との僧人ぞ〻さいく〻ぶいゆあり〻〻。ゆ〻門せしみなぞや回答ハせざるゝ人ハ彼老僧みを擡し〻〻声をるし〻〻〻を。魯智深ハ會釋もせざるれハ足過往の僧人なるが。些の飯を討く喫まほしさみ来つるのなり。ゆのの家づうハ〻きるやあるゝ老僧ぞ〻。我〻〻も飯ぬ肚み滿みるみなる紀のをいうみ討のゝも進ぶまぶきこのいうぞゝいう智深又いうゆ。れハ五臺山より来る僧人なり。縱半碗の粥一堀の飯なり〻〻ゆ〻〻ぞ。些を与へうゝ〻〻討ぶ。老僧のいゆ。ゆみハ活仏の真山より来るひ〻和尚おハ討ぶぞゝ齋を安排さべきりのを我〻も饑よ偏て既み三日みぞ及べをいゝせん〻〻魯智深これを与〻。あ〻〻ゆ大刹み斎采ゝきて

尾羅寺頽破して老僧餓死す
新編水滸畫傳卷之七
十一
十

あゝんやといへば。老僧かさねて。つゞとこの寺へ原大去廷なりしかと云十方常住ゐすりゝ。雲遊の和尚一箇の道人。烏髮の僧を道人といふ。俗中にて出家の所を僧ひゝゝ。さくる手ゝり。僧衆を対出ゝゝ。園庄をも沽却一切のがれ悉く押領ゝゝ。こゞゝゝ住持ゝゝなる。我ゝ年老こゝ。走動もとゝろまうせざる故。已下ゝを切ゝゝ。殘り留りゝも。露命を繋便もなく。餓死をるを俟ことゝゝ。語ることゝゝ。はゝゝかるゝはあゝゝば。なゞゝて官府へ訴えざるゝゝゝ。老僧の云ふことのところへ山寺ゐゝゝ衙門も遠く。彼和尚道人ゝ力強くゝゝ人を殺さるゝ。戴のゝゝなれば官軍もこれを禁じまひこえぎゝゝ。ゝのゝゝれば。魯智深ゐは疑ひゝ。彼二人が名ゝ何といふぞと問ふ。老僧答て彼和尚の姓ゝ崔氏ゐゝゝ。法名ゝ道濟。綽號ゝ生鐵佛。道人の姓ゝ丘氏ゐゝゝ。排行ゝ小乙。綽號ゝ飛天夜叉と名ゝ。この二人が爲ことろ。人を殺ゝ火を放。強盜と足一般。只ゐ之衣を穿く。假ゐ出家人ゝ打扮をゐるのゝ。見る方丈の後面ゐ栖ゐゝ。いゝも果ゐるゐ。一連の飯の香吹来ゝゝ。魯智深が鼻孔ゐ徹ゝゝ。ゐて庄邊を人ゝゐ一ツの土竈ゐ草蓋を去ゝる裏より。湯氣騰ゝと立のゝゝゝ。彼草蓋を掲起つゝれを見ゝ。只今烹おゝゝとおぼしき。一鍋の粟米粥なり。魯智深忽地眼を睜。この老和尚道理なり。前ゐゝ一粒ゝ米もゐゝゝゝひつるゝゝゐ一鍋の粥あるゝゐ。出家の身をゝゝ人を流ゝゝさつゝ得ねゝいきすきゝゝ。竈の下ゐ破漆ゝる春槿の箒を把ゝ。ゐゝゝ粥をすゝいんとするを。老僧答ゝゝゝ。喫せゝと住るを拂除つ。ゐを鍋ゐさゝゝゝ。ゝゝ五ゝ喫ゐ間ゐ。老僧お

そのまゝ鍋をおしかくし。我們寡にこの二日飯を喫ざりしかば些此一の抄化して。この粟を得たりしに。これを汝に喫れては何をもて我們が。その命を繋べき。いと情なしといふに。魯智深これを聞て。ふたゝび粥を喫んともせず。外面に立出て。手を洗ひ居る折しも。只見ば一箇の道人。肩には竹籃に魚尾と肉とを納て。上に荷葉を掩ひ。かた手に一瓶の酒を擔て。これも荷葉をもて蓋としこれを一擔として担来る。頭には皁巾を戴き。身には布衫を穿て腰に雜色の絛を繋。脚に一雙の麻鞋を穿。口に小歌をうたひつ。方丈のかたへゆくを見れば。

你在東時我在西
你無男子我無妻
我無妻時猶閒可
你無夫時好孤悽

とうたひけるまへ足をあゆまし飛天夜叉丘小乙なるべくおもひ。禅杖を引提て。その蹤を跟ゆくに道人ハ目もかけで。やがて方丈の後面なる牆の裏に到りつゝ槐樹の下に一ッの卓子をうち据え。盃盤なんど処せきまでおきならべ一人の胖和尚眉ハ漆のごとく。臉ハ墨を装ふに似て一身の肉まろく肥胞らかに胸脯に赤き毛生出て黒き肚皮を露し。その邊箱にハいと年わかき一人の女子ぞ居たりける。さて彼道人ハ竹籃と酒瓶をうち据おろし。これを卓子の上に把のせんとするとき魯智深搶て前に到れバ彼二人うち驚きて。師兄ハ那里より来ましし。何に魯智深ハ禅杖を右手に搶て。汝等なんじてこの寺の僧衆を趕出しかく穢れたる行ひをいたせしぞと罵れバ彼和尚のいふやう。師兄まづ其所に歇ひて。わがいふところを聞たまへ。この寺ハ田庄もおほく僧衆も夥ありしかど住持の

悪僧悪道人罵て戦ひ遂に乱れ九龍祝と達て而人を撃化す
魯智深廃寺ふ悪僧悪道人と罵
新編水滸画伝

長老墮弱なりしかば。幾許の老和尚を治下にもてる寺困なりし程に。大小の寺院
の僧人擅に酒を喫。女を養ひ。遂に長老をも排告出し。かし大破の寺院
となりし。愚僧は新にこゝに来りしかど。さしも名ある大刹の蹟なくなり
あらんことをおもひて。この道人とこゝろを合せ。山門をも修復し。殿宇をも修蓋
んことを要すること。志すに今日前村なる王有金(王氏の金持なり)が女児を斎請せりこの
婦人の父親は本寺の檀越なりしが。その家さまなくして。家私消乏ひとたまも又
長き病著よりうちふしし。便なき寺に時常寺に宿して米を借る愚僧
もその舊き施主檀越なりければ。これを算ぶ世の酒をとりよせ
待ちなくは彼老畜生がいふところを実とし。ましひそと言語を巧にしく
諭は魯智深これをはなし。原来彼老僧ぞこれに戯弄やしなりと疑惑
ひふらひ香積厨中に立入りしに。老僧らは既に粥を喫了り。

魯智深は老僧に對て眼を瞋し。彼和尚が説ところをきゝて。件これを
責問は老僧等言を斉しく。師兄彼悪僧に欺されたり。我們は僅に
粥をすゝる。彼は飽まで酒を喫肉を啖ふ。これをもてその清と濁とを
志りたまへ。又言を巧にして師兄を寛しめ。此方は鐵の禅杖を提彼へ立ち
かく器械ありけるなりぞくなるべしと。云へば魯智深げにもと心つきて。
ふたゝび方丈の後面へ立ゆるに。ちや。脚門を鎖したれば。大に怒りてこれを一
脚に撲地と蹴ひらき。驀直に搶て入る。彼生鐵佛崔道成は智深が再
び来るを見て。朴刀を閃し。槐樹の下より跳出と盡て搶んとするを
魯智深一声大に吼り。禅杖を輪起して崔道成と戦ふこと。十四五合に及
びしかば。道成はやく力怯ゝ架隔遮攔逃も去べき手段なければ。丘
道人背後より前にすゝみ。朴刀を拔執て。大踏にあゆみよるを魯智深

背後より脚步響きを聞けば。又々皇あり。既にその人影ちらつくを
見て。暗算的人あり〳〵叫ぶその声雷のごとくなれば崔道成大に慌忙
なれど圍子の外へ跳り出る。魯智深はその隙に左右を把て併せ戰ひ又
十合の上に及びしが。一つは餓て氣力衰へ二つは許多の路を走り疲れ
て足疲れ。二人の生力に輙く勝ざるおそれ。世の弊端を賣せ禪杖
を捻て走り出るを。二人は逃さじとぼりて。山門のみまぐ赴まれば魯智深
は又把て〳〵。且戰ひ且走るに彼二人は石橋の上まで赴まり。欄干に身
を倚て。敢て遠くも赴けず。魯智深は息もつぎあへず走ること二里ばかり
なるに。一つの林原に出るに入るに。これ赤松の林にて。遠くに見
判官の鬚のごとく。近くに見れば鬼の髪に似たり。誰か鮮血を林に洒ぎ
誰か朱砂を枝に鋪るとおぼゆ。いと猛惡林なり。この附魯

智深に向かふ。既に饑疲れ。彼二人に敵しがたし。もしも包裹找監
齋使者の面前に捨おきなれば。今身に帯し盤纏もあり。これを把らで
いかんせんと。さまざまに思ひ惑へども忽地一人の大漢に出會ふ。立
て。探頭探腦唾吐して。魯智深をこれを猜し。彼鳥人
は勁徑なる強人なるべきぞ。これ如何なる故に唾吐して退きなんとす
渠奴を殺して衣裳を剥ん。酒に當て餓死せん。彼和尚道人と戰
を決すべしと。ひとりごちあの林の裏に隱れ。松の枝掩ひさかうい
間〳〵日影に入れば。魯智深声を高くして。目今これを張望
る鳥人。やく来りて勝負を決せんとぼ彼大漢ふたりあふ
出。あゝ晦氣。これ汝は出家人なるに。兄おきつるを。ぶつ
ねびゝ〳〵やまる。いで逃げ得さべしといききつ。朴刀を手

揺〻脚踏あらし立むかへば魯智深も大に怒り。さらばまあこの拳を認せんぞと罵り〻。禪杖を輪起し殴る打んと走りかゝるを彼漢声をうけ和尚の声音おぼえあり名告れ〻と叫べども魯智深敢耳にもかけずこれ汝と三百合戦ひ〻名告るべしと欺べば彼漢も怒罵り。逆さま〻戦ひ〻その武藝の尋常あらざるを見て。ころの中暗に喝采僅に四打五打ち〻〻又いつかの。和尚等一等これ今いつべきのありと叫ぶを。五の圍子の外へ退き〻魯智深さんぬその故彼同ば彼漢いかゝ。これをこゝめより汝の声音に覚熟るところあり。その名をなのれ〻と。魯智深さまをいつち姓名を名告らる。彼漢と是を聞て。忽地朴刀を傍に投撒いの不史進を認めるゝやといへば。智深もやうやく公つき〻。原来史大郎お〻いと圍よりとび〻〻。共に悲なき再會をよろこびぬえ

魯智深いとゞ身の一五一十を說をはり〻。又史進がこゝあゝ故を問ば史進がいふ。それ〻かの日酒樓を出〻哥〻別れ。次の日鄭屠を打殺し〻逃去るひ〻をはつるゝこれも又彼酒樓あ〻。金老父子を銀子をとらせ〻〻を訴へ〻人ありこれ〻〻做公人お史進をも捕へんとせるよし風聞あり。これより〻〻渭州を立出〻延州に赴き。師父王進を索ねうど。終に尋ねいろまで。遂に北京に到り〻。世の月日をおくる間に。盤纏もやう〻盡〻〻ゆくもせんすべなく。この処〻〻来りつ。道なかばにて富る猿人も哥〻あ〻張〻に。そ〻〻〻哥〻に環會めぐりあひさよ〻〻。とゞ〻人中〻〻拉〻〻魯智深も只今在鑼寺あ〻。悪僧おと戰ひし縁由を語り出せば史進が〻。ちゝばゝこれ哥〻〻〻〻もよ彼処にゆきて色裏をとり復まべ〻といひ〻。すぐ乾〻る肉と燒餅〻をとり出〻。魯智深

低棍不遮横硬掌
圈外
掃掃
足足
亦亦
撐住

右撐勢

圈外有貶鈎
孤雁
出群
定回
打撲
鷂鷂
無論單雙手

右孤雁出群勢

を喫せ。ゴウ牙もこれを喫ひつ。二人打つれ尾鑵寺へ立入る。崔道成丘小乙は。橋の上に歇ひ居り。魯智深は史進を樹蔭より遥に鐵の禪杖を引提げ。すこし出て前に。餓疲労して戰もせずして任せさりき。今はもやうしがたし。いざ首を受よと呼れば。生鐵佛大に怒り。汝前にもこうずまの牙の徒ちぬ禿驢なあと罵り。朴刀を引敬橋を東へ走せ下る。魯智深は一つ丸に史進を得。二つ丸に肚裏充滿して精神日来に超れば。虎のごとく吼て狼のごとく前に戰ひ。ずいぶん八九合に及ざるに。崔道成漸く力怯て只走路を討る外なし。飛天夜叉丘小乙は道成を輸いるよりは。朴刀を閃かして協助せんと走り来るを。九紋龍忽地樹蔭より跳て出。汝ホ走るとなるれば。刀を揮て丘小乙を遮て住面もふらせず戰へば。魯智深ますます力を得て。一声吼りて鐵の禪杖生鐵佛が肩のあたりを閃かして。生鐵佛崔道成を橋の下へ打仆さ。筋骨碎て死なんとする。丘道人この光景を見て大に慌忙刀を拖て逃ゆくを史進は逃さじと走りかけて一條の朴刀背の上に撲地と。獅子の道人が首地上に落て。軀も倒れて血に塗る。憐べし崔道成丘小乙は。南柯の一夢となりつ。正是從前過事を仮て紀は無幸一齋来るとも今こそ人ぐらくなるぞ。

○魯智深尾鑵寺を火燒

魯智深史進の両人は寺内をすこしかりて。積香厨の後面より道成丘小乙を殺さんとや。首を縊て死しぬ。魯智深は崔深史進は。ずいぶん包裹坂雪ずいぶん。就裏あり。亦魯智深は

これをとりて舊のごとく脊負ひ角門の裏より入りて行擄れ来りし女子を索ねるに、これも井に投げ死なりとのみさぐる寺内男女一箇のもあり。小屋の裏に彼悪僧悪道人ら財禄・衣服金銀あり。又厨房に酒と肉とあるをくらひ、あくまで飽きまでこれを喫ひ、金銭は國の宝なるを撒ばらまきて、魯智深これを拾收く。史進もまたうちなへ梁園好といふ人ども五六戸の家もあるも此敗落寺をこのまゝにおくべからず。後又盗賊の棲となりんいとや焼たらひ、旅客の殃を断んにあらず。竈の下を撥開き大把の火をとり出し彼首領の尾に火を挿べ折しも風緊く大厦高楼一時に燃上る。刮々雑々と鳴ぬるうて火氣忽地天に衝こゝるに灰燼となりてうせあるなり。かくて夜人は石橋のわたりに退き立て、その焼落るを見たり。

二人ともに路をゆくこと一夜あり。やゝ明るころ家鶏の声ちらほらと聞えて、一つの村に到りぬ。やがて一軒の酒店に入りて酒をのみ魯智深は史進に對して曰ふ今すべからく那里を投げゆきて、そこ宮に史進答へて曰ふ、われ今ふたゝび少華山に立ちかへりて朱武ら二人を托ぶ。ぜひ艱難を脱はるべしとかなりとて魯智深ゆく。ちらぶ沙華村に到着し、まづ書簡をうせて安否をたづねる人なりと相語つて遂に酒店をもちて出ゆくこと七八里あり。こゝに一つの三岔路あり。智深九紋龍を見て立ちて史大郎この処にまゝ待てよ。沙華村にゆくに、南の路に赴く人、われは東京へゆくなり。東の路をこゝに来たれり。倘緑盡すれば再會を期せんと、史進ら二人は東京まで路も遥けし。こゝに別れ道中恙なく到着しぬと云ふ。互に餘

所許軍牆所竹門

魯智深
史進
賊僧を殺す

大相國寺ニ魯智深畑ヲ守リ悪者ヲ懲ス

波を惜こ遂ニ左右へわかれけりさて魯智深ハたどりゆく程ニ八九日
を経て東京ニ到着し。大相國寺ニ赴くニ千門萬戸、六市三街
人物の風流衣服の京様なるハ目を驚さずといふことなし彼大相國寺
の奇麗壮觀五臺山ニも勝りけるかくて魯智深ハ知客寮のかたへ
ゆきて山門を入るニ道人出迎へて知客ニかくと通れバ知客の僧立出て
魯智深をみるニ背ニハ一ッの包裹を背ひ腰ニ一口の戒刀を跨へ鉄の
禅杖を引提て停立る形状いと莽なる胖和尚なりしかバこゝろニ
五分の懼を生し。師兄ハ那里より来ましと問ニ魯智深ハ包裹と
禅杖をとりおろしつゝ。愚僧ハ五臺山より来れるものニて
本師真長老の書簡を将来れりこのよし智清禅師ニ稟させ給へ
かしといへバ知客の僧おもて方丈ニ伴ひ且くこゝニて待まへといひて退出
しかバ又立入りていひけり。師兄目今禅師の出させたまふなれバ戒刀を
も解はなちの七條坐具信香をもとり出して禅師の出ませるとき
礼拝の准備をもなさるゝといへバ魯智深ハ汝さおもひつかなんだ
あらせなバさりしといひて戒刀を解て七條坐具などをとり出す間に
智清禅師立出たまへバ知客の僧すなはち魯智深がことを演説すその
時魯智深ハ真長老の書簡をとり出して禅師に献り香を焼
て礼拝せし。智清禅師ハ書簡を拆開てよみたまふに魯智深が
僧人となりし縁由を審にかき写しその僧後にハかならず佛果を
得べし。偏に憐愍を垂たまへとありしかバ禅師読をハりて宣ふ
ひさしく真長老の消息なかりしに今その恙なきを知りて欣ぶ
に堪たり汝すみやか僧堂にゆきて齋を喫べしへと宣ひて智深を彼処

み使せる人ハ魯智深ハ行童み儐ま僧堂ふ赴く歌こるる。その時智
清禪師ハ許多の職事僧を方丈ま會合く宣しりる。彼僧ハ云ふ
来經畧府の軍官なり。人を打殺まるりて落髮して僧ま成
とい人ども五臺山を開さる事百度みおよび。彼山ふ住ぐきをりて
つら寺み送り来しるをりとのまふ笛ふ紀ばば彼うなりまを清規
を乱ぐ。ちれども師兄真長老の托ま付えるふをを畢んを後
めぐ。このみいぐちくよんと宜いまれば知客のいふ。それがしふ
彼僧人をるみ。全く出家の様ま あるまを縦真長老の托ま来し
まるこのなりまいぐで住むきまぐべきくいる時ま都寺のいふ。それがし
尋思いるまみ酸棗門の外なる退居廨宇ハ菜園を管をりる職と
いるまあまぐ時常軍健們或ハ門外の破落戸ふ来りる馬を走セ
羊を牽曜唹こをおまりのいる。一人の老僧彼処まありる住持まるの
故ふこれを禁ぎるりふ。却る彼ふ侮らる。今魯智深を彼廨宇
ま住持させるるば破落戸ふも怕ま仕ぐ。ふ来曜唹きりあるべうぐと
やまふそ長老ハさふなり。僧衆こる宜なるこをを引る。ぐそ侍者の
僧をりる魯智深を呼出し。智清禪師魯智深ま命せるるこる師兄
真大師の薦將みる。汝ふまるこをる来ハ。ちれ。なハち職事
僧の員ま加るこをなり。ぐこの寺の大菜園ハ酸棗門の外嶽廟の
間壁まあり。汝今より彼処ふ住持管領せよ。但毎日ふ種地道
人をりる。十擔の菜蔬を納るみ于てそ。ふ私用ふ属さべ
と命ぎれば魯智深うけるり。それぐ真長老の命ふよりる大利
み投るりハ僅ふ菜園を管らんこの爲みあぐ都寺監寺まも

なのゝんとゝまれゝとゆせば。首座のいふゝ。師兄汝今新に来りて
些の功労もなきに。いづゝ都寺となるべき。菜園を管るゝこれ
又大職事なりゝといふを。魯智深ゝゝかゝ兼引て。時に知客のいふ
やう。師兄ゝがいふところをゆるゝ。凡僧門中職事の人員おのゝ頭項あり
愚僧がごゝき知客を做ゝるのゝ。只往来の客官僧衆を管待ゝゝ茂
理會。又維那。侍者。書記首座のごゝ。これ清職ゝゝ。客易做め
かゝ。又都寺。監寺。提点院主なんどの職ゝゝ常住財物を掌管
をりゝ。古老のものゝあゝざれば做ず。汝纔に方丈に到て。おてう上等
職事を授らるべき。おほとの外に藏を管るものを藏主と呼び
殿を管るゝものを殿主と呼び園を管るものを園主と呼び化緑と
管るものを化主と呼び浴室を管るものを浴主と呼ぶ。さべゝとれ

事を主る人員をゝゝ中等の職事なり。又この外に塔を管る
ものを塔頭。飯を管るものを飯頭。茶を管るものを茶頭。菜園を管
るものを菜頭。東厠を管るものを淨頭（説文に厠は清なりと呼ぶ。これを
是車に頭る人員をゝゝ末等の職事なり。縱ば師兄のごゝき
今年菜園を管ずれば来年は塔頭ゝゝ。その次の年は浴主ゝゝ。
又その次の年は監寺ゝゝ。都寺ゝゝ。いと精細
に説示せば魯智深やゝゝ納得ゝゝかゝのごゝく出身の時あれば
これ明日彼処に退ゝゝ菜頭ゝゝなるべゝと兼引ゝゝ禪師ゝゝ
むほゝゝ。當日庫司の榜文を写さゝ。解宇の内に掛させ明日
交割あるべゝゝ命ずるゝゝ。詰朝に到りゝゝ智清禪師に法堂に
陞りゝ。法帖を魯智深に遍示へば魯智深これを受ゝゝ

魯智深
思者ウ
薬種内
へ投ジ後
日ヲ徳ス

大相國寺
魯智深
菜頭とみる

禪師ゐ辞別し。包裹を脊負ひ戒刀と禪杖を携つ。西箇の僧人ゐ送られて。酸棗門外なる廨宇ゑ入院せしとてゐ又彼菜園の左近ゑ二三十人の賭博才を成ざる破落戸潑皮あり。くつゑ菜園の菜蔬を偷ゑ。擅ゐ動止しの。今廨宇の門上ゑ新きき榜文を掛ること。

火相國寺仰委管菜園僧人魯智深前來住持自明日爲始掌管。並不許閒雜人等入園攪擾

と写ることれば。潑皮どもこれをゑて。衆の破落戸をゑ集會。今大相國寺より。魯智深といふ僧人を差して。菜園を管ることゑ彼僧が新ゐ来れる付ゐ于て。一鬧させうぜば。永く我們を怕ま從ふまじといふその付一人もこと出ず。これゐ一つの道理あり。彼和尚いまだ我們を認ぬうちこそ。ゐれ彼が入院を賀と号して。糞窖の辺ゐ誘引忽地踢落して。小要んいうゑ。衆皆ゐ妙計なりと稱讃し。商量既ゐ定りたる。魯智深ハかゝる事とも。もとより。當日廨宇の裏ゐ到りて。數箇の種地道人。さぐ〳〵まゐりて。未拜し。一應の鎖鑰など交割し了て。送り来りし二人ゐ和尚ゐ告やりて。寺ゐ立かへりぬ。尚ゑ舊の住持の老僧ゑてもゐ別を告やりて。寺ゐ立かへりぬ。魯智深ゑ。こゝ立出て。彼此を徘徊し。只これば二三十人の潑皮。世の酒禮と盒菓を擎著て。嘻〳〵とうち笑ひ。我們を隣舎街坊ゑ行ひたるものどもゐ。和尚今番入院して。まづよりを。ゆゑ及び。聊慶をゆきんして。推参いたしぬと。叮嚀ゐ。舒たる袖ゐ。魯智深ハ計とゑめ。これを接んとて。大

踏み崩すように。直ち糞窖の石ころを素くころを駆け濺ぎ
走りかゝる。左右の脚を楚と把へ。擒落さんとしころる畢竟
はじめ。曾智深を輙く擲し落さや否そは次の巻を續得くべ
らん。

新編水滸畫傳卷之七畢

備後所三谷郡
河内屋孫兵衛
藏板

相約授渕氏後嗣先世堂蔵版
再世孫回獄十有年矣
宣稱出宜呉墓也